

会員報告 第8班 平成23年4月30日(土)～5月8日(日)

○会社名 水谷建設株式会社

参加した方 (4人: ^{かどやひでのり}角谷英則 ^{いしかわ ひろし}石川 拓 ^{やましたしげお}山下茂郎 ^{やました さかえ}山下 栄の皆さん)

まず最初に、今回の東日本大震災災害復旧活動に参加させていただき有難うございました。現地の被災された方々には大変失礼かとは思いますが、自分にとって良い経験になったかと思えます。

今回の活動に参加して、一番残念に感じたことは、災害復旧活動に直接携われなかったことです。約10日間の活動期間中、自分たちの班が何をしていたか……。

担当する災害支援車両の点検や他工区の現場視察をしたりするだけで、ほぼ毎日旅館で待機する日々の連続でした。支援車両の駐車場に行けば、何十台もの車両が待機しており、他の参加者も多分同じ気持ちであったと察します。

又、現地で統括指示されている方々も非常に大変だと思いますが、せつかく税金を使って復旧活動を行うのであれば、もう少し効果的に活動できなかったものでしょうか……。もし、今回の大震災が自分の住んでいる地域で起きていたらと考えると……現地の方々のように前向きに力強く生きていけるのか不安に思います。

今後はまだ災害支援活動が必要な地域が沢山あるかと思えます。もし要請があれば是非参加させていただきたいと思えます。

最後に、二度とこのような災害が起きないことを願っています

○会社名 株式会社 川口組

参加した方 (4人: ^{あいだとしなり}会田年成 ^{やまだなおかつ}山田直克 ^{すだてとしお}巢立利夫 ^{よこやまひさあき}横山久昭の皆さん)

今回の東日本災害復旧支援現地派遣隊に参加するにあたって、平成23年4月20日に説明会に参加しました。

説明会で感じたことは、先発隊が福島県相馬市にて排水作業を行っていたので、放射能汚染が心配になりました。

放射能測定値、場所についての説明があり危険区域に派遣はないと言われたが、普段聞くことのない放射線量(マイクロシーベルト)と聞くと、実際のところ安全だと言われても、不安は残りました。

また担当業務が排水車でしたが、具体的な情報がなかったので、実際に現地に行きすぐに、排水車の操作ができるか分からなかったのも、説明会から派遣までの2週間ありましたので、その期間で実践に近い形の操作訓練を開催して欲しかったと思えます。

派遣の後、国土交通省中部地方整備局主催の災害対策用機械等操作訓練に参加し、実感しました。

情報について。

説明会に出席したあとの主な情報は、現地先発隊として派遣された業者に現況を聞くことぐらいしか正確な情報を聞ける手段が無かったため、出発前の準備をするのに情報が足りなかつ

たと思います。

当社は今回の派遣で、排水作業担当として参加したが、現地で行ったのは、待機・現場視察・車輛点検だけでした。

派遣業務についての提案。

今回当社は排水車の業務依頼数より排水車の台数が多く待機になっていたのも、派遣目的を排水車が主の目的とし、その他の業務も含んだ形で派遣されていれば、無駄なく災害復旧に参加できたと思います。

被災地に着いて、道路を走行していると、舗装道が陥没して走行不能箇所が多く見られたので、重機・機材があれば舗装道の仮復旧を待機している時間で施工可能ではと、考えました。

そのためには、出発時にダンプ・バックホウ・機材を持参して災害復旧に行くようにすれば、災害復旧という目的において対応できる幅が増えていたと思います。

ただ重機を使用するには、燃料を段取りしなければいけないため、災害復旧用の燃料確保が重要なことだと思います。

燃料については、今回の東日本大震災で露呈した問題点なので、災害復旧車として燃料車があればある程度解決できたのではないかと考えられます。以上

P S

余談ですが、派遣出発前夜荷作りしている時、新しいヘヤーブラシがあったのでどうしたのと妻に聞くと、「万が一津波に呑まれ遺体が損傷してDNA鑑定になった時のために古いヘヤーブラシを残しておくの」との返事。思わず、ビックリするやら納得するやら？

○会社名 株式会社 中村工業

参加した方（2人：かわべけいし 川辺敬志 たぐちけんたろう 田口健太郎 の皆さん）

作業場所：宮城県石巻市

私達の作業期間は、震災後最初の大型連休と重なりました。現地入りした時、下宿先の宮城県松島市は活気に溢れていました。松島市自体が深刻なまでの津波の被害を受けなかった事もあるかもしれませんが、観光地として、地元の皆さんがGWまでに営業を再開させる事に多大な努力を費やし、見事なまでに観光地としての活気を取り戻していたのでした。震災から一ヶ月半でここまで立ち直ったエネルギーは、復興支援で来ている私達にとっても、元気の源となりました。

私達の作業内容は、北上川下流付近での排水作業で、夜間の照明車の担当でした。作業は海の満ち引きでイタチごっこの様な状態でしたが、自衛隊や警察の方々の捜索活動の為に、24時間フル稼働で排水作業を行いました。中部地方整備局、東北地方整備局の担当者や、他県からの復興支援の方々との連絡や調整は頻繁に行い、与えられた業務に取り組みました。

一度だけ、作業中に河川付近に暴風警報が発令され、作業を継続するかどうかを現場で判断する場面があり、夜間の照明車のブームを上げての点灯を中断する事としましたが、夜になって風が止んできたのを確認すると、排水ポンプ車を担当していた山形県の渋谷建設さんが、「作業を継続しよう」と言われたので、私達も中部地方整備局、東北地方整備局と再び連絡を取

り、照明車の運転を再開するという出来事がありました。その場の状況に応じて柔軟に対応する事がスムーズにでき、排水作業を中断する事なく作業が続けられたのは、作業に携わる全員の気持ちが復興への足を止めたくないという一点に定まっていたからだと感じました。

今回の復興支援において、現地で待機を余儀なくされた方もみえたようですが、現地を実際に見て、この膨大な激務の中で全てをスムーズに統括し、進行する事は大変難しい問題だったのではと感じました。私達が必要なのは、どんな状況下でも業務を全うする決意と、その意識を全員が共有する事ではないかと思います。一人では無理でも、組織としてならば大きな力になる。その為に私達は、自分が出来る最大の努力をするだけです。

今も尚続いている復興活動は、そういった想いの人達が、大きな力となって行っているのだと思います。「未だに進まない復興」だとか、「遅すぎた対応」など、メディアではしばしば後向きな報道が取り上げられます。それでも、現地では精一杯の努力が日々続いているのだと私は確信しています。復興支援を経験した私達が出来る事の一つとして、液晶パネルからは見えない現実を、遠く離れた人達に伝える事も重要ではないかと思います。私達復興支援経験者としての責務は、まだまだ終わったわけではなく、そういった意味でも、今もまだ続いていると思うのです。

(各社の活動)

